

日本英学史学会 趣 意 書

今から150余年前（文化8年・1811）本木正栄が「語厄利亜国語和解」を著してから、幕末・明治にかけ本邦洋学の研究は蘭学から次第に英学に移り、何れも本邦近代化に重要な役割を果たしてきた。

いわゆる「英学」とは現在いう狭義の英語・英文学とは異なり、もっと広汎な英語を通じて行われた一切の学問の紹介・研究・啓蒙を総称するもので、そうした意味の役割をかつての蘭学に次いで英学が果たしてきたのである。

昨今、英語・英文学の研究は隆盛を極め、過般、沙翁生誕400年祭には本邦の沙翁研究の業績の量が英米に匹敵するとさえ伝えられている。このことは他の英語を通ずる研究部門にも屢々見られることで、凡そ学問の発達はその水準がある段階に達すると、必ずその学問自体の歴史に関心が向けられるはずである。

つまり、学史の研究なくしては将来の展望と進歩が望まれないから、現在日本の学界で比較的水準の高い経済学・医学・建築・科学などでは、それぞれの学史研究会をもっている。英語と英語による研究者が数において他に比肩する隆盛を誇りながら、未だに英学史研究を一つの独立部門に昇格させることが出来なかったことは残念でならない。

私たちは既に尊敬すべき幾多の英学史研究の業績をもっているが、これら先輩を擁して、茲に全国的な「日本英学史学会」を結集・創立することを提言したい。

幸い全国の同志が、その専攻の如何を問わず英学史に関心ある方々を語らって参加されんことを切望する。

1964年6月

発 起 人 一 同